

“想定外を想定する”

板 橋 仁

東日本大震災という未曾有の大災害が起こってから、あと数カ月で2年が経過しようとしている。他の被災県と異なり福島復興に大きな障害となっているのが、言わずと知れた福島第一原子力発電所の事故である。この放射能汚染事故は、天災が引き金となって新たに引き起こされた人災として、本来想定すべきものを想定しなかった当事者の用語の使い方の誤りとともに『想定外』という言葉を広めることとなった。

日本中を震撼させた想定外の事件として、オウム真理教による地下鉄サリン事件がある。当時、聖路加国際病院で患者（被害者）の治療にあたった経験を持つ奥村 徹（NBC 災害対策専門官（内閣官房安全保障・危機管理担当））の講演を聴く機会があった。『サリンなど発生後概ね3時間でカタがつく化学テロに比べ、バイオテロは長期戦となる』ことや、生命を脅かす物質が拡散するのを防ぐために、“想定外をも想定せよ”という姿勢で取り組んでいることが示された。

医療現場における危機管理の重要な柱として、医療安全対策と院内感染対策がある。平成22年に都内の大学病院で起きたアシネトバクター・バウマニによる院内感染は大きな社会問題となった（直後に厚生労働省の主導で、全ての国公私立大学附属病院の病院長や感染対策室長などが招集され、院内感染等緊急担当者会議が開かれたほどである）。アウトブレイクが起きてしまった場合には勿論速やかに対処しなければならないが、院内感染対策では何よりアウトブレイクを起こさないことが大切である。その時点における状況を見極めどれだけ素早い対応ができるか、日頃からあらゆる場面を想定し、常に適切に対処出来るように訓練しておくことが重要である。そのための行動書としてマニュアルの整備が重要となる。

マニュアルとは“誰が担当しても同質な業務結果が得られるように各個人の行動を明文化して示したもの”と定義されよう。我々は常にマニュアルを傍らに置き、内容を熟読し、理解し、常にこれを守るように行動することが求められる。では、もしマニュアル通りに行かないような事態、即ち『想定外』に遭遇したとき、我々はどのように行動すべきなのだろうか？ その時は最善とはいかなくとも次善の策を講じることが出来るように、現場で臨機応変に対応しなければならないであろう。

東日本大震災における身元不明遺体の検死業務で体験した“マニュアルの想定外”を1つ紹介したい。検死は検査者と記録者が2人1組となっていく。これは誤認を防ぎ正確な死後記録を残すためであるが、さらに検査者と記録者を交替してダブルチェックを行うことがマニュアルに明記されている。しかし、感染防止の観点からグローブを装着しているので、検査者が記録者側に回る際にはグローブを外さなければならないのだが、

次々に遺体を見なければならない現場では、その時間と手間が惜しいのである。だからといってグローブを外さなければ、記録用紙（デンタルチャート）ほか全て汚染されてしまうし、ダブルチェックをしなければ検死の正確性が損なわれ、身元が確認できなくなる、あるいは遺体の取り違えを起こす可能性も高まるであろう。

御巢鷹山でのジャンボ機墜落事故では、ダブルチェックを優先するあまりグローブを交換できずに作業を継続したという記録が残っている。当時の壮絶な現場では、そうならざるを得ないことは十分に理解できる。

そこで我々は現場の自衛隊歯科医官とともに、時間に追われる現場で正確な検死を目指しながらも感染対策も徹底するための方法として、“現場対応のダブルチェック”（本誌38巻4号 参照）を採用した。特別の事はない、要は検査者と記録者を交替しないことにしたのである。その代わり検死の精度を落とさないように、記録者が一度書いたチャートを読み上げて復唱し、検査者はもう一度診査を行う、そしてこのとき記録者も一緒に目視確認をする、という方法を採用した。実はこの読み上げは通常の検死作業でも奨励されていることで、我々はここを徹底したにすぎない。しかし役割を交替しないので同一遺体の検死中はグローブを交換しなくて良いため、最大の懸案である時間と手間の問題が解決でき、読み返しによる再確認によって何よりも大事な検死の正確性も担保したのである。そして（我々が原因で感染を拡大させるなどということがないように）現場の環境にも配慮できたのである。先日参加した災害コーディネーター研修会で、同様の考えで行っていた他県での事例報告があった。限られた条件の中で次善策を見いだしたことは、同じ現場を経験した者として共感を覚える所である。

ではこの2つの現場は“マニュアルを無視してトンデモナイことをした”のであろうか？ 否である。この代替法はマニュアルを熟読し、抑えておくべき点、外してはならない点をしっかりと把握していたからこそ出来たのである。決してマニュアルを軽視したのではなく、しっかりとマニュアルを遵守すべく行動した結果なのである。

我々は今後いろいろな局面で、“想定外を想定”すべく準備し行動するであろう。それでも『想定外』の事態が起こった場合には、これに対処できるように、不断の努力が必要なのだと思っている。

（奥羽大学歯学会 編集理事）